

農林水産大臣賞受賞

四季百果 天空の里 高野地
～多彩な果物、伝統文化を伝承しよう～

たかのじしゅうらく

受賞者 高野地集落

やわたはまし
(愛媛県八幡浜市)

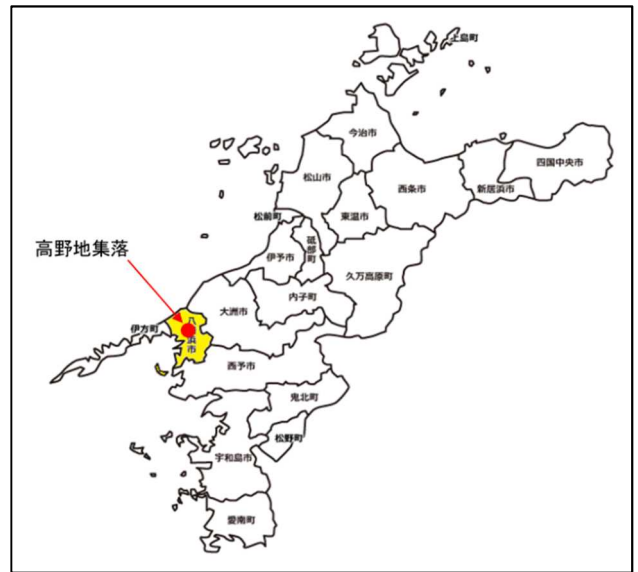
■ 地域の沿革と概要

八幡浜市は愛媛県の佐田岬半島基部に位置しており、総面積は32.9km²、人口33,000人である。

東は大洲市、南は西予市、西は伊方町に接している。また、西側の北半分は瀬戸内海、南半分は宇和海に面し、豊後水道を挟んで九州に対している。海岸線はリアス式海岸で急斜面が海岸まで迫り平地の少ない地形で、海岸部の平野に市街地や集落が点在している。

農業では、温暖な気候を生かした果樹栽培が盛んで、耕地面積の約9割の園地で柑橘が栽培されている。

第1図 位置図



■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

日本屈指の温州みかんの産地である八幡浜市の中で、高野地集落は、海岸から2km離れた標高200m～350mの山間部に位置する。総世帯数は58戸うち農家32戸、古くより果樹栽培が盛んで、農家の一戸当たり平均経営面積は約1.8haであり、現在では温州みかんを中心にキウイフルーツ、柿、梨、ブドウなどの露地栽培、せとか・不知火・甘平・紅まどんな等の施設栽培が行われる。落葉果樹と常緑

第1表 地区の概要

事項	内容
地区の規模	大字単位の集団等
地区の性格	地縁的な集団等
農家率 (内訳)	55.2%
	総世帯数 58戸 総農家数 32戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家 17戸 1種兼業農家 8戸 2種兼業農家 7戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 184ha 耕地面積 56ha 樹園地 56ha 耕地率 30.4% 農家一戸当たり耕地面積 1.8ha

果樹の両方が栽培される地域で、果樹だけで周年出荷が可能となっている。

急傾斜に民家が点在する典型的な山間地域である同集落は、近隣の他地域に比較して共助の取組が極めて盛んで、地域の農道、水路管理はもとより、春まつりや盆踊り、芋炊きなどの地域行事、伝統芸能である神楽の伝承にも地域で取り組んでいる。

また、当集落は高地に位置しているため水利が乏しく、昔から夏秋期の干ばつには困難を極めてきたが、国営南予用水農業水利事業（令和4年完成見込）を活用し、安定した水量を確保することとしている。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

高野地集落は山間部に位置し、公共交通機関や商店がなく、生活に不便な過疎集落である。

主要産業である農業においても、急傾斜地で作業効率が悪い農地が多く、昭和50年頃から平成20年頃まで主要品である温州みかんの価格低迷により、就農者が減少し、高齢化が進んで集落全体の生産意欲が減退し、耕作放棄地が増加するなどの悪循環に陥っていた。

更に、平成25年3月に集落内の長谷^{はせ}小学校が閉校したことが追い打ちをかけ、子育て世代が市内中心部に流出し、集落の活力の低下に歯止めが利かなくなっていた。

そこで、強い危機感を感じた住民たちは、これまでよりも一層、集落全体での地域づくりを進めることや、周年出荷が可能な果樹生産の利点を生かすなど、他の地域にはない良さをアピールすることで、Uターン者を増加させ、集落活動の活性化を図ったのである。

(2) むらづくりの推進体制

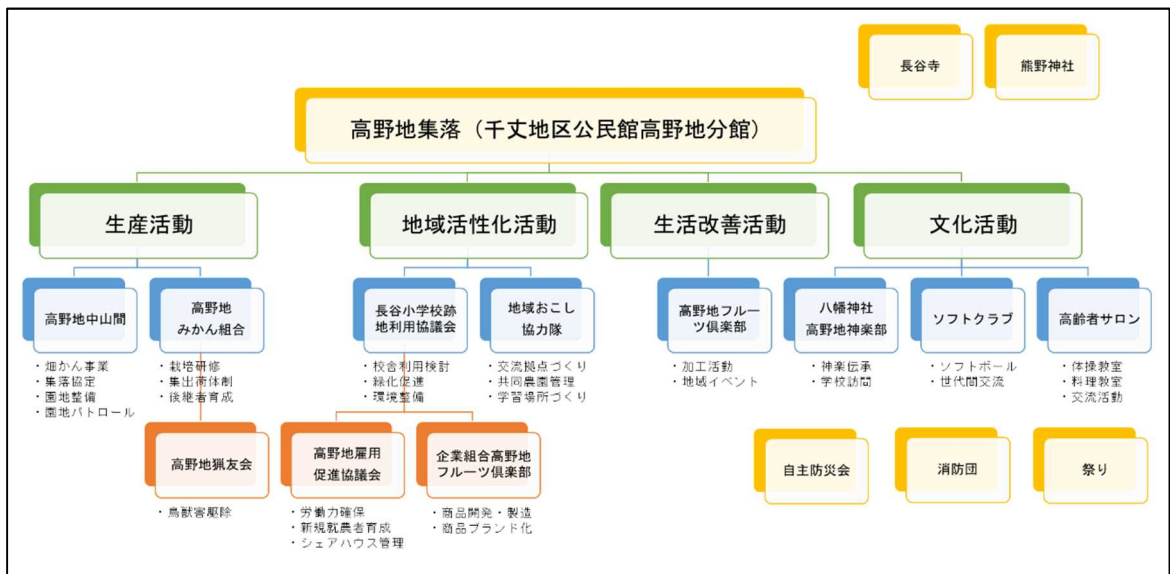
高野地集落は、集落全戸で構成され、組織の中心は、千丈地区公民館高野地分館で、館長と審議員13人が運営の主軸となっている。

毎年3月に開催される総会で、集落活動の事業計画・報告、予算などを審議・決定する。総会では、集落内の組織や行事についても全戸からの意見を聴収のうえ協議がされており、全戸が意識を統一することで、各人が責任をもって役割を果たしている。

集落活動の転機となったのは、平成23年に実施した「ふるさとづくりワークショップ」で、地域の子供を含めた約60人が参加し、集落内の点検、史跡などを確認し、意見を出し合ったことである。ワークショップでは、「子供も一緒にやれる取り組みをしたい」、「伝統を守っていきたい」、「農業の手助けになるものをつくりたい」、「新しい特産品をつくりたい」等の集落活動の目標が示され、市内でも標高が高く星空がとてもきれいな山間の集落において、特産の温州みかんをはじめ、キウイフルーツ、ブドウ、柿など様々な果樹が年間を通して栽培されており、デパートのように

多彩な果実が楽しめることから、「四季百果 天空の里 高野地」をキャッチフレーズに決定し、それ以降の活動に組み込んだ。

第2図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

柑橘栽培において理想的な立地条件とは言えない地域であるが、高野地みかん組合を中心に技術習得等に努めることで、他の地域に負けない生産量・所得を確保している。また、年間を通して多種多様な果物づくりに取り組み、経営の安定化を図ることで、多くの後継者が残る集落となっている。

地元住民の交流拠点となる旧長谷小学校と公民館を中心に、「長谷小学校跡地利用協議会」の運営、「シェアハウス長谷」の整備を通じたアルバイトの確保、女性活躍の拠点となる「企業組合高野地フルーツ倶楽部」の整備など、住民主体の幅広い活動を通じ、住民の団結力の強化や後継者の育成、女性の活躍の場の創出等に努めていることは、他の地域の模範となるものであり、市全体の集落活性化対策にも大きく貢献している。

また、これらの活動に加えて、空き家の有効利用や古民家再生など、公民館を中心に移住者の受け皿を確保できるような仕組みづくりを検討しており、集落のさらなる発展が期待できる。

集落の活動は、八幡神楽や消防団、ソフトボールクラブなど、先代からの長い歴史に裏付けされているものも多く、限られた世帯・人数の中で、各年代ごとに集落活動を継承する担い手を育成するため、80代までは現役世代として活躍できる農業生産環境を整備するとともに、高齢者サロン世代が世代間交流できるための仕組み等を構築し、生きがいの創出や、地域生活を豊かにする組織運営を実践している。

2. 農業生産面における特徴

(1) 生産面における取組

当集落は、温州みかんをはじめ、梨や柿などの多くの果物が栽培されており、品目ごとに生産部会を作って栽培研修や生育調査等を行い、高品質な農産物づくりに取り組んでいる。1集落に品目ごとの生産部会があるのは、全国的にも極めて珍しく、農業生産への集落の意欲の高さがうかがえる。

特に、「高野地みかん組合」は全農家（32戸）が参加し、共助により傾斜地での生産といった不利な条件を補い、生産活動を継続する基盤となっている。

各々の生産部会は、集出荷だけでなく、年間を通じ、組合員で栽培講習会や視察研修等を行い、栽培技術の習得や品質向上に向けた取組みを行っている。他地区と違い集落に生産



写真1 みかん生産の拠点となる集出荷場

組合があることで、剪定や摘果講習会には、夫婦や親子での参加者も多く、その出席率は8割を超えている。この講習会は、行政やJAの指導員から新しい技術を学ぶとともに、地域の先輩から技術を習得するなど、集落全体の技術向上の場となっている。

その結果、「高野地みかん組合」は、毎年「にしゅうわ農業協同組合八協共同選果場」に出荷される温州みかんの約25%にあたる1,000トンを生産するJA共同選果組織の中心産地となっている。

生産組合は、高品質安定生産を活動の軸に置き、温暖化する気象を考慮した品種構成や新品種の導入、老木からの改植、園地基盤整備、スプリンクラーの導入、後継者の育成など、集落の様々な課題に意欲的に取り組んでいる。長年の活動の結果、現在、後継者が11人育成されるなど、活動が実を結んでいる。

(2) 「シェアハウス長谷」の整備・活用

集落内の長谷小学校は少子化により平成25年に閉校となった。閉校後も、地域の祭りなどで利用する集落の中心的場所であったことから、有効に活用するため「長谷小学校跡地利用協議会」を結成し話し合いを重ねた。

当集落は、みかん収穫や共同選果場の労働力を、県内外からのアルバイトで補っており、アルバイトの宿泊所確保が課題となっていた。

この課題を解決するため、旧校舎をアルバイトの簡易宿泊所として整備することを利用協議会で決定した。宿泊所を整備するため、令和元年8月に高野地みかん組合とアルバイト受入れ農家で構成する「高野地雇用促進協議会」を結成、利用協議会が八幡浜市から借り受けた校舎を、雇用促進協議会が利用することとなった。



写真2 旧長谷小学校

雇用促進協議会は、「生産者の労働力確保の支援と新規就農者の育成」、「アルバイトへの地域文化・産業への興味関心、友好関係の構築」、「みかんアルバイトと地域との関係づくり」などを活動目的とし宿泊所整備に着手した。また、県内外から集まるアルバイトに向けた「みかんアルバイトのしおり」等も作成した。

令和元年10月から短期アルバイトの宿泊等に使えるシェアハウスとして利用を開始した。全国からアルバイト20人（平均年齢25歳）が、11月から12月の2ヶ月間に利用。若い力が、高齢化する山間地の労働力として活躍した。

シェアハウスは、利用者から好評であったが、雇用促進協議会は、利用者を実施した調査結果を基に、不足しているトイレの増設、個室整備に向けた仕切り等の設置など、更なる環境整備を進めている。

（3）働きやすい環境整備

昔から農業の長時間労働が問題となっており、後継者不足の大きな要因となっていた。そこで、昭和50年頃より農繁期の10月から12月以外の10日と第4日曜日の月2日を休みとする農休日を設定し、農業に携わる女性や後継者の働く意欲に繋がっている。

3. 生活・環境整備面における特徴

（1）地域女性の取組

農家女性8人で構成する農産加工グループ「高野地フルーツ倶楽部」（平成4年結成）の活躍が、地域の活性化の原動力となっている。

同倶楽部は、月に3～4日、柑橘、柿、梨等の集落で獲れる農産物を利用したマーマレード、ジャム、みかんシロップ漬け、ドーナツ等の加工・販売に取り組むとともに、地元のお祭りや公民館の文化祭、その他のイベント等に積極的に参加し、地域を盛り上げている。

令和元年5月に八幡浜市で国内初の開催となった「ダルメイン・世界マーマレードアワード&フェスティバル日本大会」では「河内晩柑マーマレード」がプロの部で最高賞の金賞を受賞した。

これをきっかけに新聞やテレビの取材や商品バイヤー等からの問い合わせも多くなったことから、販路開拓に積極的に取り組んだ。

さらに活動の場を広げるため令和2年6月に地域住民14人で結成する「企業組合高野地フルーツ倶楽部」を創立した。

今後も、地域の多種多様な地域農産物を利用し、新商品開発や販売戦略等の強化に努め、集落の活性化や雇用確保の核となるよう活動を展開していく予定である。



写真3 金賞を受賞した「河内晩柑マーマレード」

(2) 伝統芸能の保存・継承

地元の伝統芸能として、明治時代から集落の住民により神社に奉納されている「八幡神楽」がある。昭和50年頃に一度途絶えていたが、地元の有志により平成3年に復活させた。現在も20～60歳代の15名が、週1回程度の練習を行っている。

地元の熊野神社で奉納されるほか、市内外へも出向いて、年間15回ほど神楽を奉納している。

また、市内松柏中学校から伝統芸能伝承の指導依頼を受け指導を続けている。



写真4 神楽奉納の様子

(3) 首都圏からの移住者受け入れ

令和元年8月に、首都圏在住者を対象とした八幡浜暮らし体験ツアーを集落で受け入れ、高野地の良さと田舎暮らしの楽しさをアピールした。

この結果、ツアー参加者のうち1名が高野地集落を気に入り、令和2年4月から地域おこし協力隊員として活動を開始した。新型コロナウイルス感染症に伴う学



写真5 体験ツアー後に移住した地域おこし協力隊員

校休校中は、子供の学習の場所づくりを行うとともに、5月からは荒廃園地での野菜や花づくりに取り組んでいる。

隊員の活動は、世代を超えた地域住民の交流の場となっており、新しい地域おこし活動が展開されている。

(4) ふるさと納税返礼品への対応

高野地フルーツ倶楽部が中心となり、令和元年9月から、八幡浜市ふるさと納税への返礼品として農産物を発送する取組を開始した。

返礼品は、果物コースとマーマレードコースの2コースを用意した。果物コースは予定していた毎月50件の注文を受け、マーマレードコースは開始から約40件の注文を受けている。



写真6 箱詰めされた返礼品

(5) 他の観光資源との連携

集落内には、遊休園地を整備して四季折々の花木200種類を植栽した花木園「季楽」が開園されている。

桜の季節には「天空の里 高野地季楽の桜まつり」を開催し、市街地から集落までの道中に、集落への案内板を設置している。

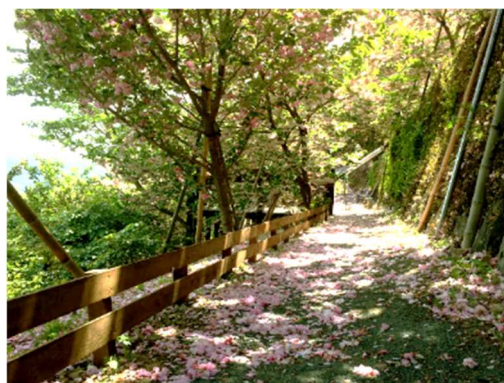


写真7 桜で敷き詰められた道

(6) 高齢者福祉サービス活動

集落の70～80歳代女性13人が社会福祉協議会と連携して「いきいきサロン」を月1回開催している。高野地集会所にて、体操や文化活動を行うほか、隣接する千丈地区と合同でちらしずしやおはぎなどの料理づくりを行うなど、地域住民間の交流を図る活動を行っている。

(7) 各世代が参加する地域活動

集落には、各世代が参加する高野地ソフトボールクラブや消防団、自主防災会などの活動がある。ソフトボールクラブの歴史は50年以上あり、現在も10代から60代が練習や試合に参加している。

また、消防団の活動においても各世代が参加し、練習を重ねることで毎年大会に参加し、入賞を続けている。さらに地元住民が自主防災会を結成し、孤立状態になるおそれの多い当集落の緊急避難に向け、ヘリポートを設置した。

これらの活動は、職業や世代を越えた地域住民の交流に重要な役割を果たしており、地域活動や農業生産活動における団結の一翼を担っている。